

# 日本シェリー研究センター

## 第21回大会

日時：平成24年(2012年)12月1日(土)12時40分受付開始

場所：東京大学本郷キャンパス 山上会館 2階 大会議室

### プログラム

1. 13:00 開会の辞 上野 和廣
2. 13:05 特別講演 森松 健介

#### 「P.B.シェリーとT.ハーディ」

3. 14:20 日本シェリー研究センター シンポジウム

#### 思想家としてのシェリー・シェリーの菜食主義

司会 白石 治恵

パネリスト-I 伊藤 真紀

「P.B.Shelleyの菜食主義とゴシシズム」

パネリスト-II 木谷 巖

「菜食主義と反ガストロミー — シェリーの  
オイディプス・ティラヌスを中心に」

レスポンス 白石 治恵

「P.B.シェリーの菜食主義」

4. 16:30 年次総会  
昨年度分会計報告・その他

事務局からのご連絡

今年度分(2012年)の会費未納の方は受付にてお支払いください。  
会場使用料の一部負担金として、参加者お一人500円を頂戴いたします。

17:30より山上会館地下1階会議室001にて懇親会(会費4,000円)を開きます。是非ご参加ください。

## 特別講演

P.B.シェリーとT.ハーディ

森松 健介

- A. まず Hardy の《ロマン派離れ》全般を概観したい。

彼は現実を超越した《慰めの源泉》を Wordsworth 等ロマン派が主張している点を受容できない。

1. ハーディ第一詩集の巻頭詩「仮のものこそ世のすべて」(“The Temporary the All”, Gibson 詩番号2)は、人生はロマンティックな夢を実現せず、若年には「一時の仮のもの」と考えていた散文性こそ生涯の全てだと歌う — 最終連では、

恋人も友も家も、より良きものに変化しはなかつた、  
運命も、僕の努力と達成も、これらを改善しなかつた、  
僕の地上での前進がその後示したものは唯一つとして  
あの時見えていたものをしっかり凌ぎはなかつた！

(Never transcended!)

—彼はこの non-transcendence を受容し 948 編の全詩をこの基盤に立つて歌う。だが Transcendence への願望は Shelley と同じだ。

2. Hardy の詩「欠落した感覚」(詩番号 80)、「《宿命》とその妻《自然》」(82)、「眠りつつ仕事をする者」(85)、「下級職のものたち」(84)、「母なる自然の嘆き」(76)、「傷ついた《母》」(736)、「失望落胆させるもの」(811)はロマン派の自然への愛や崇拜は《過去》のものだと歌う。「中立的色調」(9)では、自然界の風景は愛の脆弱性と残酷性を視覚化したものとして語り手に記憶される——ロマン派の徹底的な書き直しである。「闇のなかのツグミ」(119)では鳥と語り手との距離が大きい——Wordsworth「郭公に」、Shelley「雲雀に寄す」、Keats「ナイチンゲール」などと好対照をなす(以上は1の一例証)。

- B. だが Hardy はロマン派批判をしつつ Shelley に接近。

「シェリーの雲雀」(66)では雲雀は死に、今は土塊として扱われる。だがこの詩を絶賛する。「兆しを求める者」(30)は Shelley「アラスター」の書き直し(当日に詳説)。Shelley は、『マブの女王』、『モン・ブラン』等に見られるとおり、ロマン派詩人の中で最も「自然の中性化」(Hardy の特徴)に近づいた詩人である。また Hardy は既成宗教への反逆を Shelley と共有。そして草食主義の Shelley と同じく「籠の大ツグミ」(114)、「冬の日暮れの鳥」(115)、「平原の冬」(117)、「ウソたち」(86)、「駒鳥」(467)、「イエラムの森の話」(244)、「同情心—王立動物愛護協会の百周年祝賀」(805)その他で動物への共感を顕わにする。

- C. だが Hardy の諸小説、叙事詩劇『霸王たち』に組み込まれた Shelley からの影響の範囲の広さは瞠目すべきもの。慣習・悪法による人びとの苦しみは Shelley を受け継いでほぼ全作品に見られる。The Hand of Ethelberta は特に支配階級諧謔に満ちる。『霸王たち』の原型は Shelley の諸叙事詩。

ここに C として挙げた部分の詳細な見取り図を当日までに完成させ、この部分を特に詳しく述べたい。なお『アラスター』についての森松独自の解釈を収録する拙著(2013年2月刊)を、来聴者でご希望の方に献呈させていただきます。

(もりまつ・けんすけ：中央大学名誉教授)

## 第21回大会 シンポジウム

### 思想家としてのシェリー・シェリーの菜食主義

#### P.B.Shelley の菜食主義とゴシシズム

パネリスト-I 伊藤 真紀

18世紀末から19世紀、ロマン派の詩人たちが生きた激動の時代において、P. B. Shelley (1792-1822)は当時の世界を理想的な姿へ変革することを目指していた。彼の残した作品は、詩、散文を問わず、その本質には当時の世界への革命的示唆が見てとれる。

シェリーは様々な形で改革を試みたが、その一つに菜食主義を唱えたことが挙げられる。彼の菜食主義は単に肉を食べない、生き物を大切にするといったものとは違い、その根本に社会改革、自由を目的とした強い信念を掲げたものであったと言える。更に菜食主義に言及した詩や散文を著したのと同じ初期、彼はゴシシズムにも関心を寄せ小説やバラッドを執筆していた。

本発表では、シェリーの社会改革への主張と当時の社会への反発、理想的世界へと変革する手段として菜食主義とゴシシズムがあると考える。シェリーは社会の弊害・悪い状態を浄化するものとして菜食主義を捉え表現し、一方でその社会の状態を批判するのにゴシックの設定や要素を用い、その社会への恐怖を抱かせようとしたのではないか。このような観点から『クイーン・マブ (Queen Mab)』(1813)とその注である『自然食の擁護 (A Vindication of Natural Diet)』、バラッド詩『シスター・ローザ (“Sister Rosa: A Ballad”)』<ゴシック小説『セント・アーヴイン (St. Irvyne; or; The Rosicrucian: A Romance)』(1811)に挿入>や『悪魔の散歩 (The Devil's Walk: A Ballad)』(1812)などを中心に考察していく。

(いとう・まき : 西南学院大学 非常勤講師)

#### 菜食主義と反ガストロミー—— シェリーの『オイディプス・ティラヌス』を中心に

パネリスト-II 木谷 巖

本発表では、シェリーの菜食主義と味覚 ('taste') をめぐる感受性のポリティクスを探究する。この 'taste' という語は、十八世紀に隆盛した「趣味の人 ('the man of taste')」という言葉からも明らかのように、アディソンやヒューム、そしてバークなどによる美をめぐる趣味判断の議論、すなわち美学的側面と切り離すことのできない概念である。シェリーと 'taste' といえば、すでにティモシー・モートン (Timothy Morton) が『シェリーと味覚の革命 (Shelley and the Revolution in Taste)』(1994) において、その菜食主義と政

治性について新歴史主義やエコ・クリティシズムを取り入れて論じている。この他にも、'taste' と同種の概念として近年再注目されている言葉に「味わい・興味」を意味する 'gusto' がある。この概念は、たとえばウィリアム・ハズリットのエッセイ「興味 (味わい)」について ('On Gusto') (1816) では「芸術作品を作品たらしめる力や情熱のこと」と定義される。デニーズ・ジガンティ (Denise Gigante) の「ロマンティック・ガストロミー序説 ('Romantic Gastronomy: An Introduction') (2007) という論考によれば、この 'gusto' は、ロマン主義と深く関わる語であるにもかかわらず、シェリーを含めたこれまでのロマン派研究でほとんど注目されてきていない。

モートンやジガンティが論じる 'taste' および 'gusto' という語を手掛かりとすることで、シェリーの菜食主義をめぐるポリティカル・ガストロミーの沃野はさらなる広がりを見せる。シェリーは、『クイーン・マブ (Queen Mab)』(1813) の注釈17『自然食の擁護 (A Vindication of Natural Diet)』において、菜食主義の効能を縷々として説いているが、そこには社会の悪弊を治癒・改善する効果も含まれており、それは、社会的な弱者を捕食あるいは「食い物にする」当時の支配階級への抵抗手段でもあった。当時の悪政の代表ともいえる摂政皇太子 (ジョージ四世) の放埒かつ豪華な美食・肉食趣味に対するシェリーの批判は、これまでの研究でほとんど論じられていない。本発表では、シェリーの菜食主義を支配階級の美食・肉食趣味としての 'gusto' に向けられた嫌悪・吐き気、つまり 'disgust' ('dis-gusto') という感性的なものを原動力とした反ガストロミーと解釈する。その際、ハズリットによる 'gusto' の定義を参考に、この反ガストロミーとしての吐き気を便宜上 'dis-gusto' と名づけた (もちろんシェリーはこの語を用いていない)。

この文脈において、ジョージ四世を風刺したシェリーの劇詩『オイディプス・ティラヌス——暴君スウェルフット (Oedipus Tyrannus; or; Swellfoot the Tyrant)』(1820) は、支配階級の美食・肉食趣味に対する批判としてシェリーの 'dis-gusto' を論じる上で重要なテキストである。「スウェルフット (=腫れ足) は典型的な痛風の症状でもあり、それはジョージ四世の持病であった。さらに、バークの『フランス革命についての省察 (Reflections on the Revolution in France)』(1790) をもって嚙矢とし、さまざまなセンセーションを巻き起こした「豚のような大衆 ('swinish multitude')」というフレーズを逆手に取った豚たちの表象は、この『オイディプス・ティラヌス』において、圧制者 (tyrant) すなわち捕食者の餌食となる民衆のイメージを効果的に示している。こうしたいくつかのモチーフを上記の 'dis-gusto' とともに読み解くことを通じて、この劇詩にみられるシェリーの政治性と趣味判断 (美的判断) の関係について新たな視点をもたらしたい。

(きたに・いつき : 帝京大学 助教)

#### P.B.Shelley の菜食主義

レスポンス 白石 治恵

菜食主義は古来より世界中に存在する食習慣の一つであり、1847年にイギリス菜食主義者協会が設立されて vegetarianism という用語が確立するはるか以前の古代ギリシャ時代から「ピタゴラス式食事法」としてヨーロッパでは認知されていた。その後 17~8 世紀には、医療科学の発展と相まっ

て動物愛護の倫理的側面、農耕と牧畜の生産性を比較した経済的側面等からも支持され、19世紀を迎える頃には菜食主義はインテリ層の一つのファッションのようなものになっていた。

そのような中で P. B. シェリーは、現代のベジタリアン団体である IVU (International Vegetarian Union) のホームページにもこの時代の菜食主義者の代表として掲載されるほど、菜食主義者として広く認知されている。しかし、彼が菜食主義を主題として書いた散文は『自然食の擁護』(1813)と「菜食主義について」(1814-5、生前未発表)のみであり、あとは『擁護』とはほぼ同じ内容が『クイーン・マブ』の註の一つとして、および『理論反駁』では一節で言及されている程度で、詩作品においては『プロメテウス解縛』、『ヘラス』などにいずれも数行散見されるくらいなので、菜食主義は、主義者としての認知度の割には彼自身による表現がきわめて少ない題材と言える。よって先行研究では(ティモシー・モートンは別として)これまであまり積極的に取り扱われてきたテーマではなかった。本シンポジウムではこの「有名ではあるがあまり検討されてこなかったシェリーの菜食主義」を多角的に論じていく。伊藤氏・木谷氏が作品との関わりについてそれぞれ論じた後、司会者がレスポンスとして伝記的側面や時代思潮を紹介する。

その後はシンポジウムを有機的に活用するため、パネリストだけでなくフロアからのより多くの発言を積極的に求め、両シェリーの専門家たちが集結するこの場でしか生み出されない、より多角的で新規的な「シェリーの菜食主義」観を創出することを最終的な目標とする。

(しらいし・はるえ：酪農学園大学 准教授)